

機械の眼 カメラとレンズ



写真：カメラのレンズ（左）とカメラのボディ（右）

◎関連イベント

【担当学芸員によるフロアレクチャー】

会期中の第2・第4金曜日、16時より担当学芸員による
展示解説を行います。

※本展覧会の平券（当日有効）をお持ちの上、3階展示室にお集まりください。

【公式ガイドブック】

『光と影の芸術—写真の表現と技法』平凡社刊
定価2,625円（税込）

カメラも
ふしやう
（べつ）



2012年9月22日（土・祝）—11月18日（日）

開館時間＝午前10時～午後6時（木・金は午後5時まで）※入館は開館の30分前まで

休館日＝毎週月曜日 ※10月1日（月・敬老の日）は開館、翌1日（火）は休館、10月8日（月・祝）は開館、翌9日（火）は休館、

観覧料＝一般500（400）円／学生400（320）円／中学生・65歳以上250（200）円

※1：1円は20名以上の団体料金。東京都立写真美術館の会費は、小学生以下および障害者手帳をお持ちの方の半額（小学生は無料、中学生は10歳以上適用）。

主催＝東京都 東京都写真美術館 協賛＝凸版印刷株式会社 協力＝平凡社

東京都写真美術館 | 墨田区ガーデンプレイス内 | 3F展示室 www.syabi.com

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 TEL. 03-3280-0099



機械と人間の眼 カメラとレンズ

カメラのおこり：暗い部屋

「カメラ」の語源はラテン語の「部屋」を意味する。
紀元前、真つ暗な部屋の壁に小さな穴をあけると
外界がさかさまに映し出される現象が発見された。
この自然現象による視覚的な大スペクタクルは、刺
激的な遊びを求めた王侯貴族のエンターテインメント
として大流行した。右図のように「暗い部屋」の中
に人間が入り、小さな穴を通して映し出される像を
楽しむ行為がカメラのおこりとなった。



カメラ・オブスクラの発明



「暗い部屋」をどうにか手中におさめて楽しみたい！
という欲求から、ルネサンス期（13世紀後期～16世
紀頃）以降に発明されたのが「カメラ・オブスクラ」。
箱に映った像を楽しむほかに、「描画補助装置」とも
いわれ、映った像を描き写して、室内画や風景画など
を描くための道具とされた。

カメラ誕生！

カメラ・オブスクラの発明から約150年後の1826～27年頃、
「カメラ」として初めての撮影に成功。これまでのものとの
大きな違いは、映った像を固定できるようになったこと。
像を映し出す箱と感光材料が結びついて、ようやく「カメラ」
が誕生した！「物理学（光学）」と化学が結婚して、カメラが
生まれた。」という風にもいわれる。



カメラの眼と人間の眼、そのちがい!!

ピントを合わせたり、調光したり、まばたきしたり...カメラの眼は人間の眼の構造によく似たつくりをしています。

私たちに見える世界と記憶の再現能力には限りがあるけれど、機械の眼を通して写しだされた世界は、こんなにも不思議。



いろめがね^{めがね}

エドワード・ウェストン
ペッパー No.30 1930年

ムクムクした筋肉体!? と見紛うような黒光りしたピーマン。ただのピーマンがカメラを通すとこんなに色っぽく見えちゃうなんて。エドワード・ウェストン、どんな気持ちでピーマンを見つめていたの。それにカラーだったらこんな風に見えるはず。「色」が取り除かれて、「かたち」と「質感」に目が奪われる、面白い作品。



こころ^{こころ}ひとみ

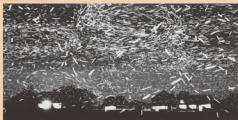


福田正治「白い風」より 1981年

一見、パステル画を思わせるような、やさしい印象のカラー写真。わたしたちが心に留めた風景を思い浮かべるとき、こんな風に曖昧な輪郭とぼんやりとした色だけが残っている気がする。植田正治は当時、最新の一眼レフカメラに大正時代の古いレンズを組み合わせた特製のカメラを使って、どこか懐かしさを感じさせるイメージをつくりだした。

まばたきするまで^{まばたき}

写真ってなんだろう。写真は静止した画像である、といえる。あらゆる現象は止まることなく動いているのに、ある瞬間や、シャッターを開いていた一定の時間だけを、写真という空間に蓄積することができる。わたしたちの眼は一瞬を見つめることで精一杯だけれど、カメラは時間を自在に写しだすことを可能にした機械ともいえる。



福田正治「はたの虹舞」(瀬戸内海とその周辺)より 1956年

ナルホド!

作家は欲しい表現を叶える為の技法や、機械の特長をフル活用して写真の中に落とし込む。それぞれの作家が持つ、見えないテクニックが1枚の作品に凝らされているというわけ。

この表現、使える!と思った作品をメモしておこう。

カメラの
進化に
ついて

大きい → 小さい

重い → 軽い

つまり、カメラの進化とは
人間の眼と同一化すること!!



人間の身体の規格(手のひらの大きさや目の位置)は極端には変わらないので、どこまでも小さく、軽く、を目指してもカメラを扱う人間の身体にじっくりこななければ意味が無い!そこで、写真を撮る行為と人間の身体を無理なく自然なかたちでフィットさせたカメラが1925年に発売されたライカ。発売以来、90年近くが経った今でもライカの創り出した人間工学の標準が生きているのがすごいところ。とはいえ、2010年代のいま、ケータイカメラが主流になって、カメラに対する認識が変わりつつあるのが実情。ライカ登場以降、カメラ史に残る(?)改革は現在、じんわり浸透中なう。